

The tailor and cutter. — Weekly ed. (ザ・テーラー・アンド・カッター)

London : John Williamson, [186-?] — [1---

The tailor and cutter. — Monthly ed. (ザ・テーラー・アンド・カッター)

→ **The gentleman's tailor** (ザ・ジェントルマンズ・テーラー)

→ **The tailor and cutter. — Monthly ed.**

(ザ・テーラー・アンド・カッター)

London : John Williamson, 1866 — [19--]

Hiler p.831

“tailor (テーラー)”とは、裁断されたものをひとつにまとめて実際にスーツを作る人。“cutter (カッター)”とはいわば設計技師であり、衣服の裁ち方をデザインし、同時に裁断もする人のこと。19世紀末、多くの優秀なユダヤ人テーラーがポーランド、ロシア、ハンガリー、ドイツからロンドンに移り住み、故国で学んだエレガンスを英国スタイルに結びつけ、サヴィル・ロウの名声に多大な貢献をしたといわれている。本誌はこのような時代から20世紀前半にわたって紳士服のスタイル、素材、製図、制作の技術や当時業界で抱えていた問題などを掲載したテーラリング業界人向け専門誌のひとつである。

「The tailor and cutter」には週刊版と月刊版があり、それぞれの対象や内容は若干異なっている。週刊版の創刊年は不明だが、月刊版は『ヒラー』の文献目録によると1866年から刊行されていたようだ。同年に創立されたロンドンの“The Tailor & Cutter, School of Art and Cutting Academy”という紳士服職人の養成学校と同じ組織の発行。当時は専属の講師ではなくそれぞれその道のプロフェッショナルが授業を担当していたが、この学校もテーラリング業界の先駆けとなる講師陣でかためられていた。そこで学んだ生徒たちは、後に第一線で活躍することになる。また、今でいう通信教育的なテキストなども発刊されていた。なお、この学校のカッティング（製図）方法は「C.P.G.システム」であると広告に記述されているので、本誌の製図も同様と思われる。日本のテーラリング専門誌「洋装」の主幹西谷一男氏の記事（1933.1月号）によると、当時の英米のテーラリング専門誌はいずれも各誌の創案による製図方式のみを用い、その宣伝に努めていたそうだ。

まずWeekly ed.（週刊）の内容を見てみよう。週刊版のほうは毎号、業界のトピックスや問題点の解説から求人情報、そして技術や感性向上のための講座、基本的かつ重要なテクニックのポイントや新スタイルを教授するページを満載している。

当時、テーラリング業界は様々な問題を抱えていた。本誌が言及したそのひとつにミシンがある。ミシンの発達、導入によってそれまで必要としなかった知識など、新たに取り入れなくてはならないものも多かった。もちろんすべての作業がミシンでできるわけではないし、従来の手作業より仕上りが優れていれば機械を使用するものの、そうでない部分も多かった。手に勝るものはない。だが一方でミシンの導入により、それまで不可能だったことが可能になったりもした。技術が向上したのもまた事実である。この頃から“tailor”と“cutter”の区別がはっきりしてきた。宗教、身分、

性別についての問題も取り上げられている。「宗教や身分で差別する者が存在するが、本当にいい腕をもつことは宗教や身分とは関係ない。なぜなら、必要なものは知識・技術・経験なのである。しかし、一方で男女においては差がないとは言いきれない。それは、性別による性質の違いがあるからである」というのが本誌の主張だった。

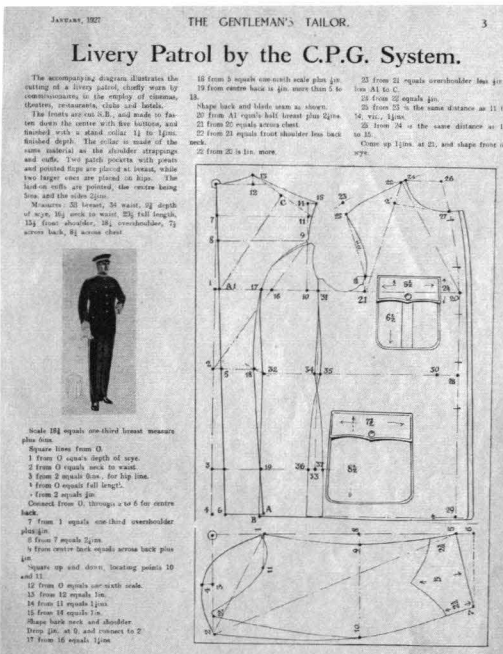
冒頭で述べた製図や技術の説明においては、毎号詳しい図解が数多く用いられ、ひとつひとつが詳しく解説されている。例えば「衿の製作」において大切なこととして、「返りについて・衿腰と衿幅の関係・地の目」が取り上げられている。さらに細かく見るとアイロンテクニックにも言及している。例えば、「衿は中心に向かってアイロンをかける」（この技法を今日我々は「衿殺し」と呼んでいる）。そしてアイロンによるゴージライン（上衿とラベルのはぎ目）の扱い方については、「裁ち目がバイアスで変形しやすいためアイロン作業で形を崩さないように行なう」ことの重要性を説いている。体型と袖の関係については、「前肩の寸法は正確に測らなくてはならない。肩幅が安定することによって体型をカバーし袖も安定する」とある。興味深いことに、当時の標準チェスト（男性の胸囲寸法）と今日我々が標準としている寸法が同じであった。またこれら紳士服の要素を婦人服にも生かし、展開させていた。さらに、本誌は単に製図や技術の解説だけでなく、製品の取扱い方法も紹介しており、毛皮やその他高級素材の手入れ方法や保管の仕方、プリーツの入ったスカートなどの扱い方など様々な記事が見られる。

Monthly ed. (月刊版)のほうは、より実践的な技術面の記事が中心である。そのレベルも週刊版の入門書的な内容にくらべ、より専門的だ。掲載されている製図ひとつ取っても、そのバリエーションが豊富かつ詳細に説明されている。機能服も、スキーウェア・ゴルフウェア・乗馬服・軍服・ナイトウェアから女性用サイクリングスーツや婦人消防官のユニフォームにいたる広範囲な種類を取り扱っている。

本館所蔵の1901-04年代の週刊版には求人や店舗貸出しの広告が載っている程度だった。それにくらべ1920年代から30年代の月刊版における広告誌面は時代背景もあってか、かなり量が多く、興味深いものがある。今日もツイードで有名な“Harris Tweed”をはじめとする生地メーカー、副資材屋、鋏屋、クリーニング屋など多彩で、当時のイギリスにおける業界の様子が垣間見られよう。

週刊・月刊の両誌とも1世紀近い時を経ているにもかかわらず、その内容には驚くほど新鮮さを感じる。正統的テーラリングの「技・知・美」すべてを極めるため、さらに掘り下げて分析し、研究していく価値と必要性のある資料である。

(鈴木憲道)



「The gentleman's tailor」1927年1月号 当時主に映画館・劇場やホテルの守衛として雇われていた、パトロール業者組合員の制服（職業服）の製図